

## 推薦のことば

小児救急に関する本は巷に数多くありますが、さらに新たな一冊が加わることになりました。タイトルもそうですが、内容もまた大変にユニークな本です。本の名は、「小児救急秘伝の書～ひと目でわかる診療の要点と極意～」といます。

著者の鬼頭正夫先生は、長年、名古屋の南医療生活協同組合総合病院南生協病院で、小児医療の最先端に立って活躍された、いわば歴戦の小児科医です。私が鬼頭先生と一緒に仕事をしたのは、もう30年近い昔になります。当時、すでに名古屋で卒後研修を始めていた先生は、特に小児救急や幅広い領域のプライマリケアを勉強したいと、沖縄県立中部病院小児科のレジデントに応募しました。当時の沖縄県立中部病院は野戦病院と呼ばれていて、24時間、365日オープンな救急室に県内各地から患者が押し寄せていました。いつも殺気だった雰囲気の中で、礼儀正しく、丁寧に患者さんに接する鬼頭先生は、特異な存在でした。仕事熱心で患者さんやその家族の信頼は厚く、医師、看護師からの評価は高く、また、研修医仲間ともよい人間関係を築いていました。

鬼頭先生がこれまで蓄積し、温めてきた小児救急のエッセンスを後進に伝えるために書かれた本書は、体裁が従来のどのマニュアルとも異なります。まず、小児救急の秘伝四十九を五十音順に並べて本の全容を示し、次いで、目次では秘伝の内容を膨らませ、系統的に再構築しています。随所に配置された囲み記事の「極意」は、さりげない表現のなかに臨床上の大事な事柄が適切に示されています。また、「いっぷく」は、著者の幅広い趣味と教養が、読者を新しい知の世界へと導いてくれます。

この本は小児医療の第一線で、「小児救急はいかにあるべきか」を考え続けてきた練達の小児科医による秘伝の書であり、研修医はその極意を悟り、さらに自らのキャリアアップにつなげてほしいと思います。一方、指

導医にはマンネリ化した指導を反省し、研修医の意欲を高めるにはどのような指導をすればよいか考えさせてくれる書です。

この本で小児救急のすべてをカバーできるわけではありません。読者はまず、この本で、経験豊かな小児科医から小児救急に対する心構えを学び、疾患に対するアプローチの仕方、チーム医療、地域連携などについて学んでいただきたい。さらに、解決できない点は、多くの専門書や文献にあたって、自ら学んでほしいと思います。そして、子どもと家族の視点に立って医療を実践すれば、ひとりひとりがわが国の小児医療の向上に貢献できると考えます。小児医療に携わる多くの医師に本書をお勧めします。

2011年5月 初夏の陽光降りそそぐ沖縄にて

日本小児救急医学会監事  
(元沖縄県立中部病院院長)

**安次嶺 馨**